

平成二十三年二月十七日

NHKの日曜美術館にて絹谷幸二が、興福寺の無着世親像を描ききらむとする工程のドキュメンタリ番組を観る。北圓堂に籠りて二像をスケッチすること二時間、アトリエにてそを見ながら二百號に擴大、キャンバスに貼りて針穴を開けながらの輪廓取り、それに一度繪の具にて寫實的に像を描きあげたりと思ふや、次には繪の具を吹掛け、たゞき付けて塗りつぶしたるには一驚す、一度繪を毀すためなりと言ふ。再度輪廓を描きて人物畫像完成、背景は群青に塗りつぶされ、その夜空に星の流れを描き、かと思ふ内に般若心經の經文を書して無着像完成す。幼少時、猿澤池畔の料亭の子ながら、寺に寝起きしては朝夕に般若心經を誦したる經驗に加へ、この運慶の作とさるる無着、世親像、數ある彫刻中一番心を捉へて離さなきものなれば、未だそこまでの境地に至らぬものの古稀を轉機にこころみたるものと言ふ。この畫家、ヴェネツィアにて長くフレスコ畫の摸寫をし、とりわけジョットの繪に傾倒したれば、重層せる敬虔なる宗教心の滲み出す繪となれるならむ。

昨年十一月、奈良より高野山に向はんとする時間の空きに偶々北圓堂拜觀の機會に恵まれ、無着世親像に更めてこころ搏たれたれば、絹谷畫伯が心境のよく理解せられたり。

アサンガ(無着)の慈眼に射られ立ち竦む空を體せぬ己が心は

バスバンド(世親)俺は知らぬと横向けど暖かき心我を包めり

その折に詠みし拙き歌なれど、歸京してこれも偶々田中英道氏の論文に出會ひて目を通すに、この無着像は西行が、世親像は文覺上人がモデルなりとあるのに目を見開かせられたり。作者の運慶、荒廢せる東寺の修復を文覺に命ぜられたれば、面識あるは當然なれど、西行に會ひたることありとせば、三十歳の頃か。無着像は西行の死後二十年の頃の作といふが、畫像によるものより、直接會ひしことなくば、かかる迫眞性は出でざるものならむや。西行、最晩年に焼けたる東大寺再建の勸進寄付を伊勢にて重源より頼まれ、遙々平泉に向き、京に戻りしをり、嗟峨にて懷舊の念もだしがたき「たはぶれ歌」を幾つか詠めり。

竹馬を杖にもけふはたのむかなわらは遊びを思ひ出でつつ

昔せしかくれ遊びになりなばや片隅もとに寄り臥せりつつ

戀しきをたはぶれられしそのかみのいはけなかりし折りの心は

無着が西行なる説を信ずとせば、餘命二三年の、かかる西行が老いたる姿想像せらる。